

る年に子どもさんが亡くなつて、それから何か月も

知らないうちにお母さんが認知症になられたと聞いた。子どもだけが生きがいで、ぎりぎりまでがんばっておられたのだろうが、その生きがいが無くなったとたんに、自分の人生も閉じてしまわれたお母さん。こんなことが、今の日本では誰にも、いつでも起こりうることなのだろう。

悲劇を繰り返さないために、親の人生と子ども的人生をはっきり区別するために、勇気を持って子どもをキャンプに出しませんか。キャンプは安全に、しかも楽しさの中で、自然に親離れ、子離れを促す大切な機会になる。新しい時代の「旅」は「キャンプ」から始まる。かわいい子には積極的にキャンプをすることを勧めたい。しかし、きつとここでも「うちの子なんか受け入れてくれるところがない」というお母

さんの声が聞こえてきそうである。

育成会は運動体なのでから、必要だけれどないものは、みんなで作り出せばいいではありませんか。実際にやっているところと、連携すればいいではありませんか。ボランティアがいなければ、育てればいいではありませんか。



### ハイテクの町・音楽のまち 川崎市で大都市

問題協議会開催  
理事長 笹野井 庸夫

#### 第二十六回大都市問題

協議会が七月十日から十一日にかけて、神奈川県川崎駅前の音楽のまち・かわさきのシンボル、ミューザ川崎シンフォニーホールで開催されました。

本大会には、十五政令指定都市に東京都を加えて十六都市手をつなぐ育成

会の役員員六十六人が参加し協議を行いました。大阪市育成会からは、私を含め三人参加しました。

協議会第一日目は、第一部として、川崎市健康福祉局石川障害福祉課長から、川崎市の福祉施策の現況説明があり、続いて、全日本育成会から中央情報報告として、来年度の国家予算に対する重点要望事項について説明がありました。

第二部として、①障害者自立支援法について、②医療機関への改善について、③療育手帳についてをテーマに順次、課題協議が進められました。

大阪市育成会からは、特に医療機関等への改善について、役員会や会員の切実な思いをふまえて意見発表しました。まず、医療機関に対する意見として、知的障害があり、平素よりてんかん発作の頻度が高い方が、てんかん発作によ

り階段から転落し、救急搬送されたが、そこでは応急処置のみという事例がありました。主治医のおられる病院へ転送していただけるよう再々お願いしたが、主治医不在で中々受け入れてもらえず、やっとのことでその病院に搬送して

もらうことができたことを報告し、主治医が不在でも病院内連携により、緊急時の対応を安心なものにできるよう、医療機関等に要望してほしいと訴えました。

又、救急搬送にあたっての出来事ですが、救急車を願したときに、本人がひどく拒否したため救急隊員から「これだけ嫌がっているから、搬送することが出来な。本人の意思確認が大事」と一旦は断られたということがあります。

支援者が知的障害がある方の状況を説明し、何とか病院に搬送できたことを報告し、知的障害のある方

の場合、親(支援者)の同意や意見も十分に聞き取っていただき、総合的な判断による適切な救急搬送の体制作りを訴えました。

協議会第二日目は、前日に続き④成年後見制度について、⑤施策施行の県の役割、市の役割について⑥本人の会との関わりについて、課題協議が行なわれました。

大阪市育成会からは、本市の成年後見支援センターの現況を説明し、大阪市社会福祉協議会と連携した取り組みを展開していることを報告しました。

それぞれの都市からの報告をもとに協議を進め、よりよい育成会活動、知的障害者福祉の推進に寄与できるよう意見交換しました。

協議会として、障害者の生活が守られ、権利を擁護されること願ひ、国に対して要望していくことを決議しました。